

昭和 S P レコードで辿れば

昭和天皇御即位

S P レコード収集家 ■ 城内 實

(一)

大正十五年十二月二十五日午前一時二十五分、文武百官の集まる葉山御用邸にてかねて病氣療養中であつた大正天皇が崩御になつた。これを受けて葉山では摂政裕仁親王に対する劔璽渡御の儀がとり行われ、同時に宮中の賢所では純白の祭服に身を包んだ掌典長が皇靈殿神殿に新帝踐祚を奉告し、ここに第百二十四代の昭和天皇が誕生した。

「書経」の「百姓昭明。協和萬邦。黎民於變時雍。」から採つた若槻禮次郎内閣の政府原案「昭和」に対し、枢密院議長の倉富勇三郎が異議を差し挟んだが、最終的に原案通りとなり、即日対外発表された。

昭和元年は改元の日の十二月

二十五日から大晦日までのわずか七日しか存在しなかつた。その数少ない昭和元年の十二月二十七日、国民の悲哀とある種の歎喜の中で、新天皇皇后両陛下は帝都に還幸啓され、二十八日には登極最初の大典である朝見の儀が肅々ととり行われた。

(二)

これと時を同じくして内務省より全国地方長官宛に民心を安定せしむるよう努力し、また歌舞音曲を停止するようにとの通達が発せられた。レコード各社及びこれを購買する庶民までがこの通達にどれほど影響されたか定かではないが、昭和二年十二月二十五日の多摩御陵における大正天皇の御一年祭をもって諒闇が明けけるまで、確かにこれ

といったはやり歌は世に出なかつた。

ただ、レコード界では昭和二年に驚印レーベルの日本蓄音器商会が米国コロムビアと提携し、英米の電気吹込盤を発売、また、米国資本の日本ビクター株式会社も設立された。戦前昭和の二大レーベル日本コロムビアと日本ビクターの基盤が着々と築かれていた。

昭和三年に入ると奇しくも大正の終焉と昭和天皇の御即位にほぼ一致する形でレコード界に二つの大きな変化が起こり始めた。それは、針音の目立つ旧吹込みから音のより鮮明な電気吹込みへの移行と今日の歌謡曲の原型とも言える昭和流行歌の誕生であつた。

(三)

大正時代には、神長瞭月、鳥取春陽、横尾晩秋、石田一松らの書生節や島村抱月率いる芸術座の松井須磨子の「復活唱歌」(別名「カチューシャの唄」)

といった曲がかなり流行つた。しかし、これらの大正期の日本の音盤は英米のそれと比べるとはなはだ粗悪であつた。ラッパに向かつて大きな声をあげる吹込み方式の音盤は音質が劣悪で、添付の歌詞カードを見なければ歌い手や語り手が何を言っているのか完全には聞き取れないものが多い。それだけではなく、当時ののはやり唄のメロディ自体が単調で味気なく、歌い手の声も大変未熟であつた。

(四)

関東大震災後の帝都復興が強く感じられるようになった昭和三年の十一月、はじめて「日本コロムビア」のレーベルで流行歌が発売された。以前紹介した藤原義江の「からたちの花」、

「まちぼうけ」といった童謡調の歌曲や浅草オペラ出身の二村定一が歌ったジャズ・ソング「あお空」、「アラビアの唄」などである。

それに対し、日本ビクターからはそれより早い二月に藤原義江の「出船の港」、「ふるさと」等の盤が発売される。藤原義江の「出船の港」は、作詞時雨音羽、作曲中山晋平という布陣で大正十四年に米國ビクター本社で吹込まれた曲で、洋盤として赤盤レーベルで発売された。日本ビクターからは続いて五月に佐藤千夜子の「波浮の港」、七月には同じ曲の藤原義江盤が発売され、双方合わせて十六万枚という当時としては大ヒットとなった。

(五)

ここに筆者が所有する鷺印レーベル「ニッポノホン」のレコードがある。タイトルは、「御即位式盛儀の実況―昭和三年十一月十日、紫宸殿の御儀」となっている。これはJ.O.A.K放送

局（現在のNHK東京ラジオ第一放送）の実況放送をレコード化したものである。実況放送をレコード化したものとしては、

昭和十一年にポリドールから発売された「前畑がんばれ」で有名なベルリン・オリンピックの「水上競技実況放送」が代表的であるが、おそらくこの御即位式のレコードは実況放送レコードとしては嚆矢に属するであろう。

この音盤からはAKのアナウンサーの次のような声が聞ける。「天皇陛下並びに皇后陛下には、出御あらせられたのであります。満場寂として声なく、（…）いきます。諸員一同恭しく敬礼を致します。（…）はこ

とごとく起立を致しています。天皇皇后両陛下には高御座並びに御帳台に昇御に相成りました。侍従及び女官は、西園寺ひめのかみ（？）の合図によりまして御帳を掲げ参らせませす。この時また、庭上の諸員は最敬礼を致します。神前身に迫る思いが致します。

（鉦鼓の音）



田中総理大臣は西階を降り始めました。今南庭に北面して立ちました。（中略）侍従は御笏を拝戴して退くとともに、内大臣は勅語書を奉りました。」

（筆者の音盤からの聞き取りによる。不明瞭の箇所一部省略。）
同じ十一月には、この即位の大札を記念して日本ビクターのレーベルで「大札奉祝唱歌」というレコードが発売されている。

(六)

当時の新聞では、東郷元帥らを筆頭に文部百官が京都に集まり、前日九日に京都で初めて閣議が行われことや、在京の大使

公使、外国使節、庶民代表らも即位の礼に参列したことが報じられている。また、即位の大札に合わせて恩赦令が発令されるところにも恩賞の授与、さらにはこの慶事に合わせていくつかの神社の昇格も行われ、社会的にも大きな節目となった。

「紫宸殿の御儀」の実況放送盤は、大正時代を代表する鷺印レーベル「ニッポノホン」の最後のレコードに属する。大正時代がこのレコードをもって名実とともに終わりを告げ、昭和という新しい時代が、格段に音質が向上したレコードのメロディとともにいよいよ幕を開けたのであった。

（続く）